

高等学校

平成 14 年 度

# 教育研究員研究報告書

特 別 活 動

東京都教職員研修センター

平成14年度

教育研究員名簿（特別活動）

No.	学区	学 校 名	氏 名	備 考
1	4	都 立 大 山 高 等 学 校	多 田 雄 作	世話人
2	6	都 立 南 葛 飾 高 等 学 校	塩 崎 智 之	
3	6	都 立 深 川 高 等 学 校	中 井 良 和	
4	9	都 立 久 留 米 高 等 学 校	高 見 治 己	記録

（担当） 東京都教職員研修センター 指導主事 出張 吉訓

# 目 次

## I はじめに

1 研究のねらい	2
2 研究の背景と主題設定の理由	2
3 研究の方法	3

## II 生徒の意識調査

1 調査の目的	4
2 調査の対象	4
3 調査結果及び考察	4
4 「望ましい資質」をはぐくむための指導・援助の観点	7

## III 実践事例

事例1 ホームルーム活動 ～障害者福祉作業所でのボランティア活動を通しての取り組み～	8
事例2 ホームルーム活動 ～相互評価を取り入れた文化祭の取り組み～	12
事例3 ホームルーム活動 ～構成的グループエンカウンターを取り入れた 自己理解を深める取り組み～	16
事例4 学 校 行 事 ～移動教室を通しての取り組み～	20
IV まとめ	24

## 【研究主題】

集団や社会の一員としての望ましい資質をはぐくむ指導の工夫

### I はじめに

#### 1 研究のねらい

新学習指導要領では、特別活動の目標が下記のようになり、従来の「集団の一員」という文言が、「集団や社会の一員」に改められた。

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

このことは、今日の生徒が、集団や社会の中で人間としての在り方生き方についての自覚を深めていき、社会的に自立できる人間として成長することが求められているためである。

そこで、本研究では、学校生活を通して、生徒一人一人が「集団や社会の一員」として、社会的に自立した人間になるための望ましい資質をはぐくむ指導の在り方を探求することにした。

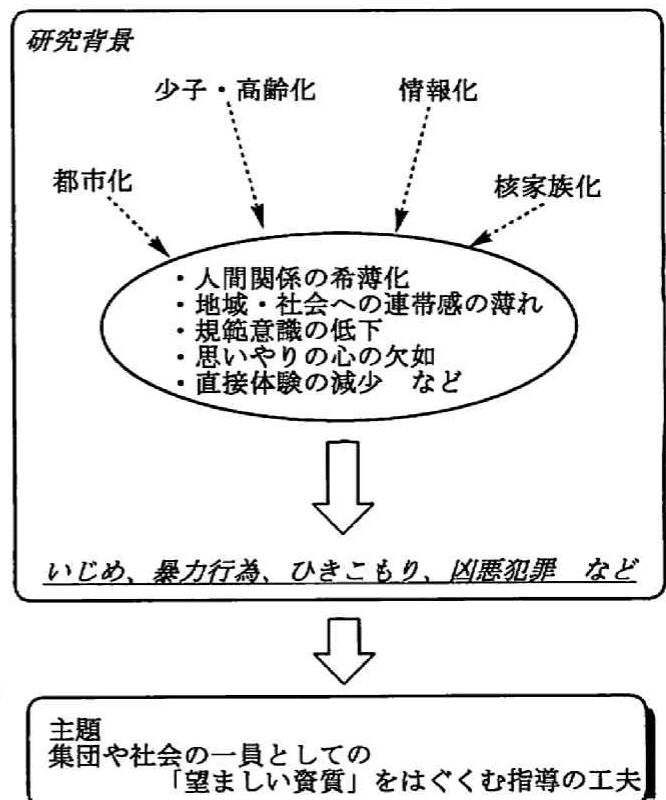
#### 2 研究の背景と主題設定の理由

今日、いじめ・暴力行為・ひきこもり・凶悪犯罪の増加など青少年をめぐる様々な課題が生じており、子どもたちに精神的な自立の遅れや社会性の不足などが見られる。

このような課題の背景には、都市化や核家族化、少子・高齢化などの進展により、地域社会の連帯感、人間関係の希薄化が進み、思いやりの心や社会性など豊かな人間性が子どもたちにはぐくまれにくくなっていることが考えられる。

平成8年7月の中央教育審議会第一次答申においても、子どもたちの人間関係をつくる力が弱いなどの社会性の不足や倫理観の低下が指摘されている。

このため、学校や地域社会は、生徒一人一人がよりよい社会の形成者となるために、このような課題に正面から向き合い、手立てを講じなければならない。



特に、学校では、生徒の豊かな成長を支えるために、意図的・計画的に多様な体験活動の機会の充実を図り、思いやりの心、豊かな人間性や社会性、自ら考え行動できる力などを培っていくことが必要である。

このことは、生徒が様々な体験を積み重ね、社会のルールや自ら考え行動する力を身に付け、自立や自我の確立に向けて成長していくことができる環境の整備・充実を図ることである。そして、このような環境の整備・充実を図ることが、集団や社会の一員として主体的に取り組む人間に成長していく基盤作りにつながると考えられる。

そこで、本研究部会では、特別活動の特質である集団活動、とりわけ学校内外における多様な体験活動を通して、集団や社会の一員として生きていくために必要とされる「望ましい資質」を育成することが重要であると考え、標記主題を設定した。

### 3 研究の方法

本研究では、生徒一人一人が「集団や社会の一員」として、集団や社会の中で人間としての在り方生き方についての自覚を深め、社会的に自立した人間になるための「望ましい資質」を次のように考えた。

#### 望ましい資質

集団や社会の一員として、望ましい行動を自ら選択、決定していく態度や能力	
自己の所属する集団に所属感や連帯感をもち、集団生活や社会生活の向上のために力を尽くそうとする態度	
・ 集団や社会の一員としての役割はなにか、また自分はどのような責任を果たさなければならないかを自覚できること	・ 役割を遂行することによって自己の存在感を実感し生きがいを見い出せること ・ 他の成員と協力し、集団生活における規範や社会生活上のルールを尊重し責任を果たせること

以上の「望ましい資質」にしたがい、生徒の意識と現状を把握することを目的としてのアンケート調査を実施し、分析した。

また、指導法の工夫について下記の実践に取り組んだ。

#### 実践事例

- 事例1 ホームルーム活動 障害者福祉作業所でのボランティア活動を通しての取り組み
- 事例2 ホームルーム活動 相互評価を取り入れた文化祭の取り組み
- 事例3 ホームルーム活動 構成的グループエンカウンターを取り入れた  
自己理解を深める取り組み
- 事例4 学 校 行 事 移動教室を通しての取り組み

実践後、成果と課題をまとめた。

## II 生徒の意識調査

### 1 調査の目的

本研究では、生徒の意識と現状を把握するために36項目のアンケート調査を実施した。

このことによって、I-3の「研究の方法」で挙げた「望ましい資質」をはぐくむための指導・援助の観点を得ることを目的とした。

なお、本報告書では、特徴的な16項目のアンケート調査結果とその考察について掲載する。

### 2 調査の対象

研究員の所属する5校（全日制普通科高校3校、定時制普通科高校1校、定時制商業科高校1校）の生徒（回答人数 計886名）

### 3 調査結果及び考察

86.7%の生徒が「一緒にいて心の落ち着く集団がある」（図1）、また、79.2%の生徒が「みんなで協力して何かをすることが好きである」（図2）と回答している。

このことから、生徒は何らかの集団に所属感や連帯感をもっていると言える。地域社会の連帯感や人間関係の希薄化が言われている点から、今後は、社会の一員としての所属感や連帯感をもたせ、よりよい社会の形成者となるための適切な指導・援助を行う必要がある。

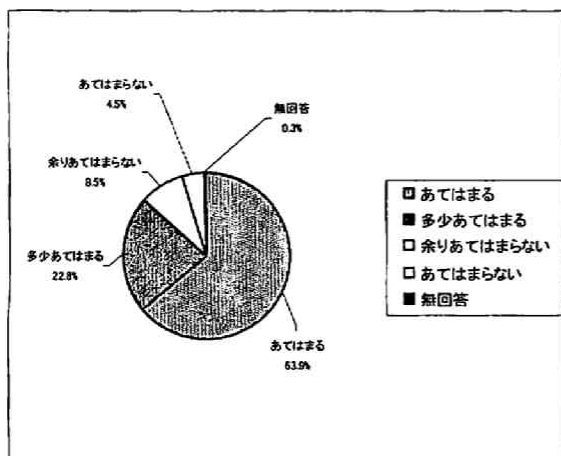


図1 一緒にいて心の落ち着く集団がある

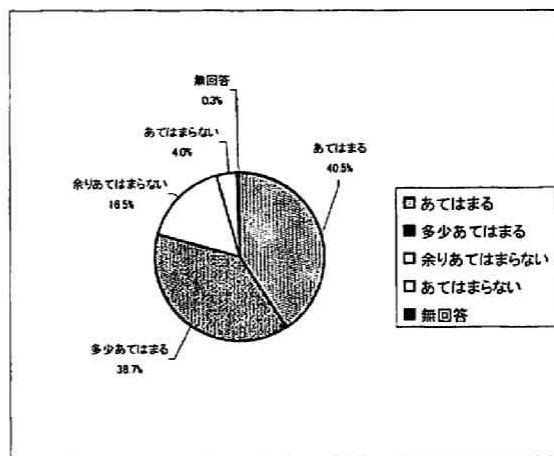


図2 みんなで協力して何かをすることが好きである

92.4%の生徒が「約束は守る」（図3）、あるいは、79.3%の生徒が「いやなことでも責任をもって取り組む」（図4）と回答しており、責任感の強さがうかがえる。しかし、54.7%の生徒が「クラスで決めた仕事より自分の用事を優先する」（図5）、あるいは、44.2%の生徒が「与えられた仕事を途中で投げ出すことがある」（図6）と回答している。

このことから、責任を果たそうとする気持ちをもちながらも、自分の都合で行動する自分本位な面や自分のやるべきことを最後までやり遂げられない意志の弱さが見られる。

このため、ホームルーム活動、学校行事、生徒会活動を通して、生徒一人一人に責任を果たす場を提供し、集団や社会の成員として自覚ある行動ができるように指導・援助を行う必要がある。

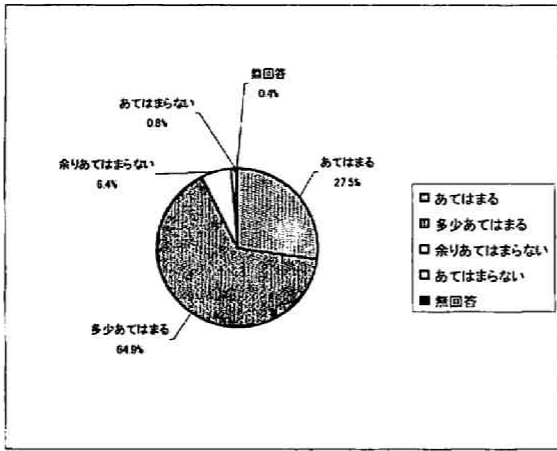


図3 約束は守る

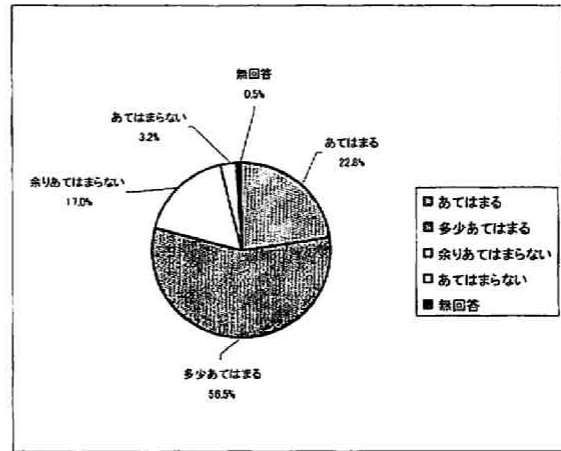


図4 いやなことでも責任をもって取り組む

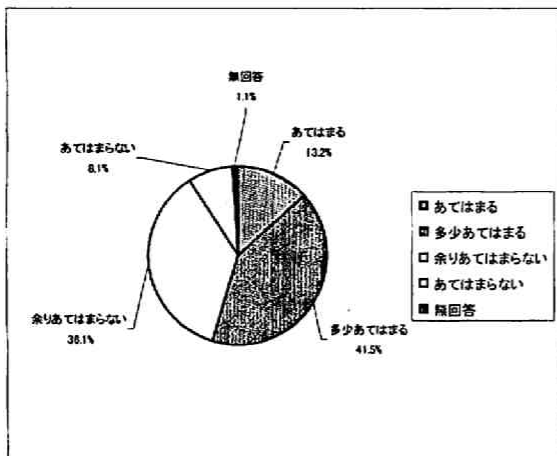


図5 クラスで決めた仕事より自分の用事を優先する

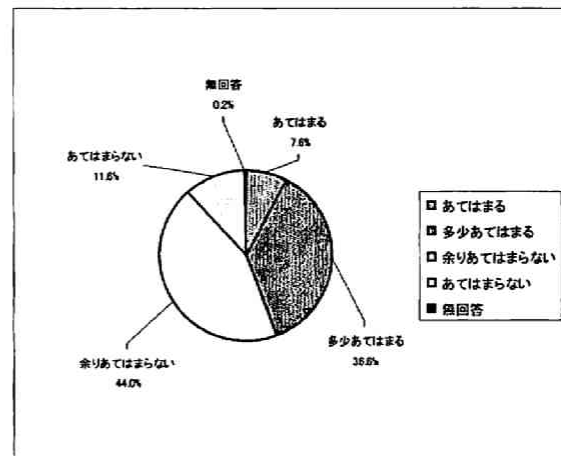


図6 与えられた仕事を途中で投げ出すことがある

85.0%の生徒が「一つの仕事をやりとげて充実感を得たことがある」(図7)と回答している。一方で「どんなことでも計画的に進められる」(図8)と回答している生徒は45.5%である。

このことから、生徒一人一人に対して、計画性をもたせた自主的・自発的な行動を促し、達成感や充実感が得られるように指導・援助を行う必要がある。

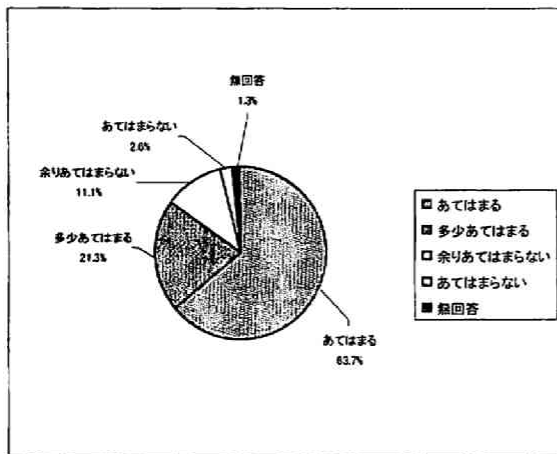


図7 一つの仕事をやりとげて充実感を得たことがある

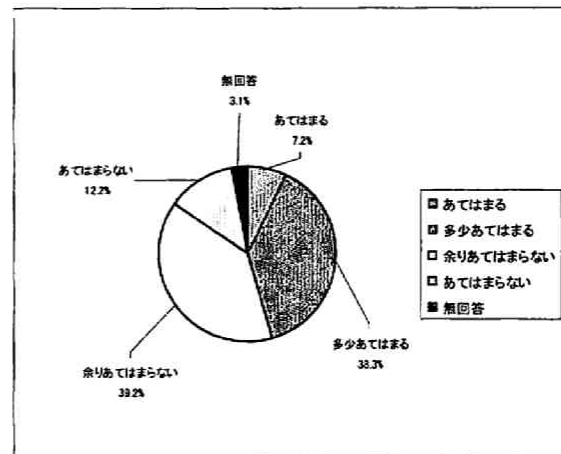


図8 どんなことでも計画的に進められる

89. 5%の生徒が「他人に迷惑をかけてはいけない」(図9)、あるいは、81.3%の生徒が「校則は守るようにしている」(図10)と回答しており、広い意味での規範意識はあると言える。しかし、40.4%の生徒が「遅刻をしてもかまわない」(図11)、あるいは、71.8%の生徒が「ゴミのポイ捨てをしたことがある」(図12)と回答している。

このことから、生徒の多くは、他人に迷惑をかけてはいけないと思いながらも、実際の行動が伴わなかったり、規範意識のずれが生じていると考えられる。

このため、学校生活や社会生活上のルールを生徒一人一人が見つめ直す機会を意図的に設定し、規範意識を高めていくための指導・援助を行う必要がある。

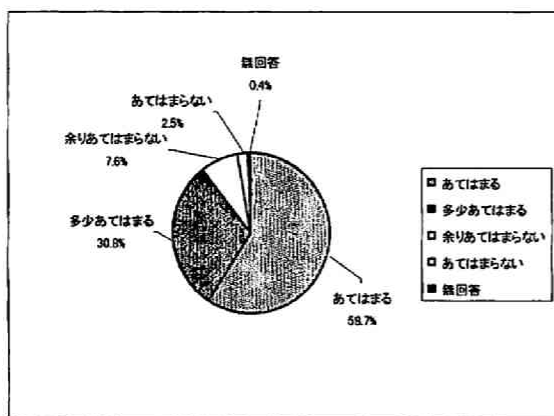


図9 他人に迷惑をかけてはいけない

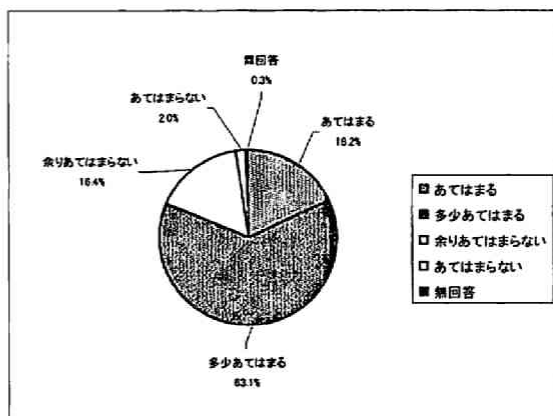


図10 校則は守るようにしている

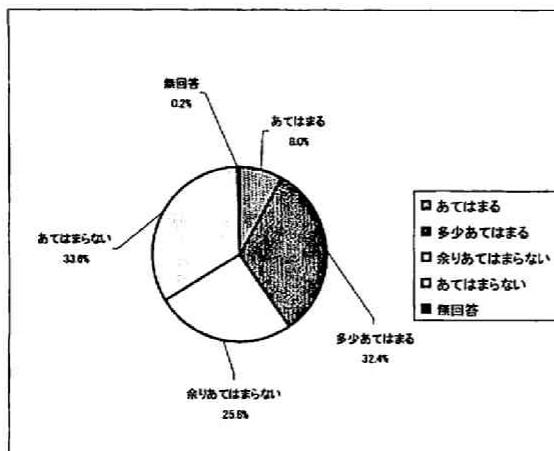


図11 遅刻をしてもかまわない

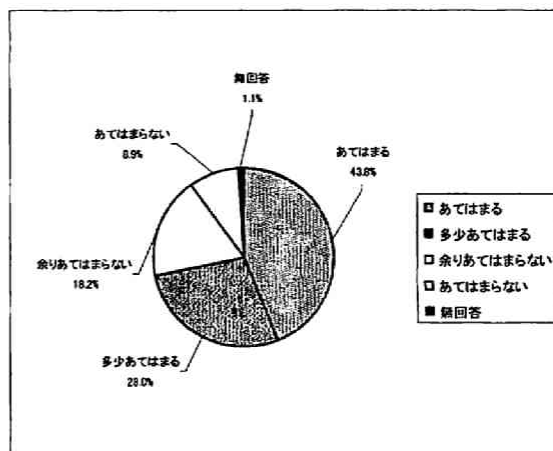


図12 ゴミのポイ捨てをしたことがある

90. 8%の生徒が「何か人の役に立つことがしたい」(図13)と回答しており、ばくぜんとしながらも自分自身を何かに役立てたいと考えていることが分かる。しかし、「自分の長所をわかっている」(図14)より「自分の短所をわかっている」(図15)と回答した生徒の割合が上回っている。また、82.3%の生徒が「自分の考えていることを相手に誤解されることがある」(図16)と回答している。このことから、積極的に行動することをためらっている生徒がいると考えられる。

このため、指導者が生徒を適切に褒め認めることで、生徒一人一人が自分の長所を含めた自己をきちんと理解し、自分のよさを引き出し、伸ばし、自己の存在感を実感し、自信がもてるように指導・援助を行う必要がある。



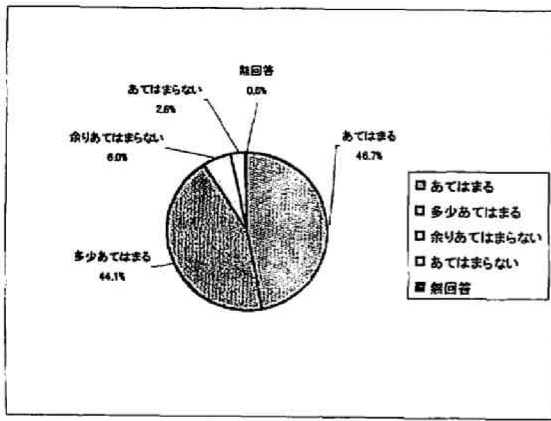


図 1 3 何か人の役に立つことをしたい

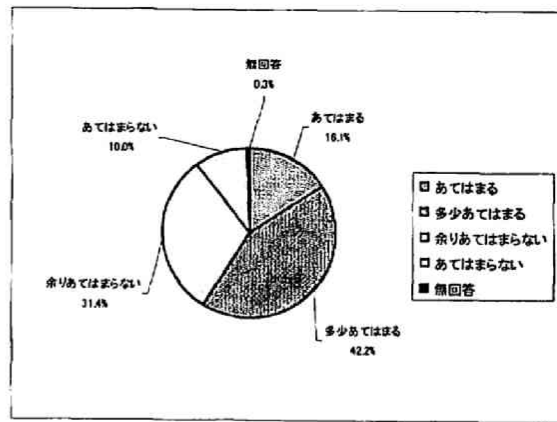


図 1 4 自分の長所をわかっている

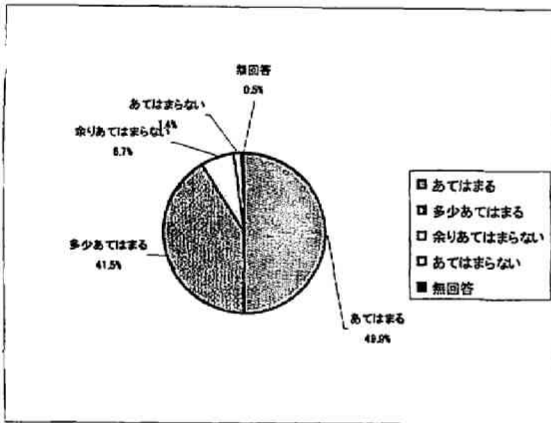


図 1 5 自分の短所を分かっている

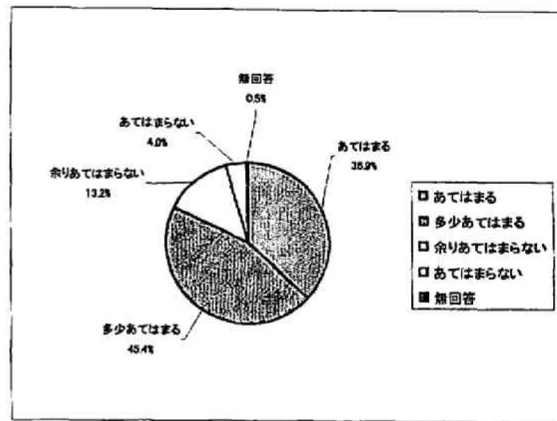


図 1 6 自分の考えていることを相手に誤解されることがある

#### 4 「望ましい資質」をはぐくむための指導・援助の観点

アンケート調査の結果について考察を行い、下記のA～Eの5点の「望ましい資質」をはぐくむための指導・援助の観点を得た。

- A 社会の一員としての所属感や連帯感をもたせ、よりよい社会の形成者となるための適切な指導・援助を行う必要がある。
- B ホームルーム活動、学校行事、生徒会活動を通して、生徒一人一人に責任を果たす場を提供し、集団や社会の成員として自覚ある行動ができるように指導・援助を行う必要がある。
- C 生徒一人一人に対して、計画性をもたせた自主的・自発的な行動を促し、達成感や充実感が得られるように指導・援助を行う必要がある。
- D 学校生活や社会生活上のルールを生徒一人一人が見つめ直す機会を意図的に設定し、規範意識を高めていくための指導・援助を行う必要がある。
- E 指導者が生徒を適切に褒め認めることで、生徒一人一人が自分の長所を含めた自己をきちんと理解し、自分のよさを引き出し、伸ばし、自己の存在感を実感し、自信がもてるように指導・援助を行う必要がある。

## Ⅲ 実践事例

### 事例1 ホームルーム活動

#### 集団や社会の一員としての望ましい資質をはぐくむ指導の工夫 ～障害者福祉作業所でのボランティア活動を通しての取り組み～

#### 1 指導のねらい

ボランティア活動は、個人の自由意思を基本とし、自分の技能や時間帯をすすんで提供し、他人や社会に貢献する活動である。ボランティア活動を行うに当たっては、他人を思いやる心、互いを認め合い共に生きていく態度、自他の生命や人権を尊重する精神が必要である。

このようなボランティア活動は、生徒が自らも社会の一員であることを自覚し、互いが支え合う社会の仕組みを実感するという点において重要な意味をもつ。また他の人々や社会のために役立つ体験を通して、自己実現を図り、自他が共に価値ある大切な存在であることを実感し、豊かな心情を培うことができる活動である。

このため、学校教育においては、ボランティア活動をはじめ社会貢献や地域活動にかかわっていくために必要な知識や技能を育成することが極めて大切である。

本事例では、ホームルーム活動の中で生徒の自主的・実践的活動としてボランティア活動を行い、集団や社会の一員として望ましい資質の一つである社会貢献について考えるきっかけとするとともに、他人を思いやる心、互いを認め合い共に生きていく態度や自他の生命や人権を尊重する精神をはぐくむことをねらいとした。

具体的なねらいとして下記の4点を設定し、ボランティア活動として障害者福祉作業所での作業に参加し、障害のある人と一緒に作業に取り組むとともに交流を行った。

- (1) 社会奉仕の精神を養い豊かな心をはぐくむ。
- (2) 社会に役立つことにより自己実現を図る。
- (3) 働くことの大切さを学ぶ。
- (4) 今後の進路決定の参考とする。

#### 2 対象 普通科 定時制課程 第3学年 9名

#### 3 取り組み

##### (1) 取り組みのきっかけ

すでにホームルームの中の数人が、自主的に老人ホームや養護学校の運動会などの手伝いをするボランティア活動を行っていた。

そこで、指導者は、多くの生徒がボランティア活動などの社会貢献に興味があると考え、ホームルームの時間にボランティア活動についての話し合いを行った。


その結果、多くの生徒からボランティア活動を体験してみたいという意見が出された。また、生徒から様々なボランティア活動の候補が挙げられた。これらの候補から、障害者福祉作業所でのボランティア体験に取り組むことになった。

(2) 具体的な取り組み

活動の実際と結果

	第1時	第2・3時	第4・5時
活動内容	活動内容の説明、導入	社会貢献の種類 自分にできるボランティア活動	障害のある人についての知識とその社会的背景 障害者福祉作業所について
生徒の活動	ボランティア活動とは何かを考える。 奉仕性 無償性 自主性 公共性 先駆性 など	どんな社会貢献があるかを考える。 社会福祉活動 環境保護 保全活動 災害援助活動 地域コミュニティ活動 国際貢献 など 自分ができるボランティア活動を考え、提示された資料をもとに発表する。	障害のある人の状況について学習する。 障害の状態 就労形態 福祉の実状 など 障害者福祉作業所について学習する。 歴史 作業内容 構成員 など
結果	奉仕性、無償性を理解していた。 しかし、自主性、公共性、先駆性においては不十分であったため指導者から資料などを提示して考えるきっかけをもたせた。	指導者から資料などを提示して考えるきっかけをもたせた。 老人ホームでの手伝いや、災害地の救援などが挙げられたが、それ以外はあまり思い浮かばなかった。 このことから、様々な社会貢献についての知識は少ないことが分かった。 次に、実際に自分ができ るボランティア活動については、生徒から様々な意見が出された。 今後は、出されたボランティア活動を実際に行うための情報を得る手段について考える機会をつくる必要がある。	障害者福祉作業所の様子を撮ったビデオを見てから指導者から具体的な説明を受けた。 生徒はビデオの内容について関心を示し、特に障害のある人の現状や作業内容について強い関心を示した。 また、生徒は障害のある人の働いている様子を見て参加する気持ちを高めた。 しかし、生徒は障害の状態、就労形態、福祉の実状についての理解は不十分だった。 指導者は、事前指導を十分に行ったり、資料を工夫したりして理解を促し、福祉に関する知識をより深めて参加させることが大切である。



	第6・7時	第8時
活動内容	ボランティア活動の実践 障害者福祉作業所にて	反省会
生徒の活動	所長からの講話を聞く。 障害のある人と一緒に作業を行う。 休み時間に交流を行う。 終わりの会で感想を話す。	作業や交流のビデオを見て、感想を話す。 アンケート、作文を書く。
結果	<p>はじめに所長から、障害のある人の現状、勤務条件、福祉の実状、作業所の沿革などの説明を聞いた。現場の具体的な話を聞き、生徒は事前学習の時よりも熱心に耳を傾けた。</p> <p>次に、障害のある人と一緒に作業に入った。作業内容は、箱折り、ダイレクトメール封入、宛名シール貼りであった。障害のある人とペアになって作業を進めた。</p> <p>最初はとまどいが感じられたが、時間が経つにつれ、上手にコミュニケーションを取り、仲良く作業に取り組んでいた。4時間にも及ぶ長時間の作業にもかかわらず熱心に取り組んだ。</p> <p>また、休憩時間にも生徒は障害のある人と雑談したり、写真を撮ったりして交流を深めた。</p> <p>終わりの会で、生徒は作業所の人の前で感想を話した。「仕事に対する態度がまじめで、学ぶべきものがあった」「初めてなので、とてもいい経験になった」「また機会があればやりたい」「この経験を自分の人生に役立てたい」「このようなよい出会いを増やしていきたい」などの言葉が生徒からでた。</p>	<p>事後アンケートで、生徒は作業所の人を「心の温かい人」などと書き、障害のある人に対して理解が深まった。</p> <p>また、「いろいろな人がこのようなボランティア活動をやってみたらいい」「障害のある人がもっと伸び伸びできる社会づくりが必要だ」などと書いていることから、社会奉仕の気持ちが高まった。</p> <p>「お金をもらうのは大変だと思った」と書いていることから、働くことの大変さや大切さを感じられた。</p> <p>今後やってみたいボランティア活動については、障害のある人との交流以外に、老人介護、保育関係などが書かれていた。これらことから、生徒はボランティア活動に興味・関心を示したと言える。今後もこのような活動を意図的に設定していく必要がある。</p>
		

#### 4 考察

今回の実践を通して次のことが分かった。

「何か人に役立つことをしたい」というアンケートの問いに対して、多くの生徒が「したい」と答えているということは、ボランティア活動に興味・関心があることを示唆している。また、ボランティア活動への参加の呼びかけに対して、積極的な生徒が多かった。

これらのことから、多くの生徒が「社会と積極的にかかわりたい」、あるいは「困った人を助けたい」と思っていると言える。しかし、自分からその機会を見つけ、やってみようとする実行力が伴っていない現状がある。

また、ボランティア活動の経験が少ないという要因は、どこでどんなボランティア活動をしたらよいかという情報や知識が少ないということが考えられる。

これらのことから、学校においてホームルーム活動などを通して、ボランティア活動を体験する機会を設けることは非常に大切である。

本事例では、実際のボランティア活動までに7時間の事前学習を実施した。ビデオを見せるなど工夫をしたが、事前学習で多くの生徒に細かいところまで理解を促すことが難しかった。ボランティア活動について指導者の知識を高めるとともに、第一線で活動している方々から話を聞くことなど、様々な事前学習の方法を考える必要がある。

定時制課程では、生徒が昼間に仕事をしており、夜間にボランティア活動ができる場所を捜すことが難しい。このため、実施日の日程調整に苦労した。定時制課程でボランティア活動を実施する場合には、日程や時間の設定については特に配慮する必要がある。

ボランティア活動当日、生徒は熱心に取り組み、帰りには「とてもよかった」、「作業所の人たちはとてもよい人だ」との声が聞かれた。また「来年もやりたい」という声が聞かれた。ボランティア活動の体験を通して、他人の役に立つことで達成感や充実感が得られたとともに、自分の存在を認識し直すきっかけとなった。

今後は、一つのホームルームだけでボランティア活動を行うのではなく、学校全体として取り組むことにより、多くの生徒が参加できる体制を作っていく必要がある。方法としては学校行事や生徒会活動の中での取り組みが考えられる。

また、地域の福祉施設やボランティア団体との連絡を密にとり、生徒の希望にあった活動が設定できるよう準備しておくことが重要である。

今回は、このような活動を通して、奉仕の心や他人を思いやる心などの豊かな心をはぐくみ、社会の一員としての望ましい資質を育成することができた。

障害者福祉作業所でのボランティア活動について

障害者福祉作業所でボランティア活動をしたことによって、感じたことや思ったことを次の項目にしたがって書いてください。

- 1 作業は楽しかったですか。具体的にあげてください。  
話しながら作業がやれたので
- 2 作業所の人たちと仲良くできましたか。  
楽しかった。  
できました。
- 3 作業所の人たちについて何か感じることはありませんか。  
がえぼこはたらいていると思いました。
- 4 このボランティアを通してあなたにとって何か学びましたか。  
なんでもいっしょけんめいにお仕事
- 5 このボランティアを通して考えることがあれば書いてください。大切に思いました。  
いろいろな人がこの様なボランティアを
- 6 このボランティアを通して労働について考えることがあれば書いてください。思っています。  
やってみるといいと思います。  
はたらいてお金をもらうのは大変だと思いました。
- 7 自分の将来のことについて考えることができましたか。あれば具体的に書いてください。  
ピアノをずっとやっているの  
ピアノ教師をしたい。
- 8 ボランティアに行く前と行った後では自分の思っていたことはどういうふうになりましたか。  
思っていた通りとほとんど変わり  
ませんでした。
- 9 次にどんなボランティアをやりたいですか。  
やっぱり今回のように障害のある  
人たちとつながるボランティアを  
やりたいと思います。

## 事例2 ホームルーム活動

### 集団や社会の一員としての望ましい資質をはぐくむ指導の工夫 ～相互評価を取り入れた文化祭の取り組み～

#### 1 ねらい

文化祭の取り組みは、一人一人の生徒の多様な能力・適性、興味・関心などが生かされる活動でホームルーム全体に貢献でき、その中で豊かな人間性や社会性をはぐくむことができる活動である。本事例では、文化祭の指導目標として次の3点を設定し、実践を行った。

- (1) 文化祭に取り組む中で、生徒同士の共通理解を深め、参加意識を高めることで、連帯感や達成感、また責任感をはぐくむこと
- (2) 生徒自身が創意工夫をし、自ら進んで計画的に活動を行うようにすること
- (3) 他者を認め、自己理解を深め、自信をもてるようにすること

その上で、アンケート調査より考察した「望ましい資質」をはぐくむための指導・援助の観点(7頁参照)のうち、下記のB・C・Eに視点を当てた実践を行った。

	「望ましい資質」をはぐくむための指導・援助の観点	指導のねらい	指導の工夫
B	ホームルーム活動、学校行事、生徒会活動を通して、生徒一人一人に責任を果たす場を提供し、集団や社会の成員として自覚ある行動ができるように指導・援助を行う必要がある。	集団の一員として責任を果たす場を提供する。	一人一人の興味・関心に基づいた細かな役割分担
C	生徒一人一人に対して、計画性をもたせた自主的・自発的な行動を促し、達成感や充実感が得られるように指導・援助を行う必要がある。	自主的・自発的な行動を促し、達成感や充実感をもたせる。	準備計画の立案(「取り組みのしおり」と相互評価)
E	指導者が生徒を適切に褒め認めることで、生徒一人一人が自分の長所を含めた自己をきちんと理解し、自分のよさを引き出し、伸ばし、自己の存在感を実感し、自信をもてるように指導・援助を行う必要がある。	長所を含めた自己理解と自己の存在感を実感し、自信をもたせる。	反省会の実施(他者及び自己評価)

#### 2 対象 普通科 全日制課程 第2学年 39名

#### 3 取り組み

生徒は、文化祭の企画としてホームルームを4つの班に分け、各班がそれぞれ20分程度の出し物をするバラエティショーに決定した。各班の出し物の決定まではスムーズに進行した。しかし、各班の具体的な出し物の話し合いになると「どのような内容にしていくか」で行き詰まり、夏休み中は作業が全くはかどらない状況になった。

そこで、文化祭委員は「よりよい文化祭を作り上げていくにはどのようにすればよいか」、また、「ホームルーム全員の生徒がやる気をもって自主的・自発的に行動するにはどうすればよいか」について話し合った。

その結果、生徒一人一人の役割分担が明確になっていないことや企画の到達点が各自異なることなどが原因として挙げられた。そこで、文化祭委員は、これらの原因を解決するために「取り組みのしおり」を作成し、その中に相互評価表を盛り込むことにした。この相互評価によって、生徒一人一人が文化祭当日までの過程の中で、反省する点やよかった点に気付けるように工夫した。

《活動の実際》

目 程	ホームルームの活動	文化祭委員の活動	指導者の指導・援助
6/19 L HR	・文化祭について	・今年度の文化祭についての説明をする。 ・放課後、ホームルーム企画を決めるために、アンケートの実施を提案し、作成する。	・文化祭委員の説明を受けて、本校の文化祭について、文化祭の取り組み方などについて説明を付け加えた。 ・ホームルームの目標を掲げることの必要性を説明した。
6/20 放課後	・アンケート実施	・アンケートを基に、ホームルーム目標とスローガン案、さらに、いくつかのホームルーム企画案を決める。	・できる限り、全員が役割をもち、取り組めるような企画を推した。
6/26 L HR	・ホームルーム目標スローガン決定 ・ホームルーム企画決定	・議事進行	・重い雰囲気にならぬよう配慮した。
夏休み前	・文化祭準備の取り組み計画	・期末考査終了までに、準備のために決めなければならないことなど話し合った。 ・各班が出し物案や夏休みの準備計画などを作成できる用紙を作り、文化祭に向けて意欲的に取り組んだ。	・自分たちで進めていけるように、指導・援助しながら、文化祭委員のやり方を見守るようにした。
夏休み中	・ほとんどの班が集まらず、計画通りに進まなかった。	・部活などで集まらず、準備も全く進んでいなかったため、みんなのやる気をどうすれば引き出せるのか話し合った。 ・各班の出し物や準備計画などをホームルーム全員が把握することが大切であると気が付き、「取り組みのしおり」の作成を決めた。	・みんなが意欲的に取り組めない理由を文化祭委員自身に考えさせ、解決法も自分たちで気付くまで根気よく話を聞いた。 ・計画表だけではなく、到達点が統一できるよう、相互評価表も盛り込むことを提案した。
8/30		・文化祭委員は、班長と副班長に文化祭の企画を成功させたいという思いを伝え、話し合いを行い、進行状況や役割分担の確認、今後の準備計画や相互評価表の項目などを決めた。	・生徒一人一人が自主的・自発的な行動ができるように指導・助言した。 ・相互評価項目については、各班で自由に考えさせるようにした。
9/1～11	・「取り組みのしおり」に従って準備	・教室に、各班の進行状況が分かるようにしたいと考え、準備計画書を掲示した。	・4班の準備計画書を拡大し、掲示することを指導・援助した。
9/12	・リハーサル①	・発表班の相互評価表を班員以外が付けるように指示した。	・発表班が自分たちの仕上がり状況を確認できるようにビデオ録画を行った。
9/13	・反省会 ・リハーサル②	・相互評価表を基に良いところはさらに伸ばし、悪いところは反省し、改善してもらうよう指示した。	
9/14・15	・文化祭当日	・準備・後片付けなど全て指示を出し、自分たちで行った。	・当日文化祭委員だけでホームルーム全体を指揮できるように、指導・援助した。
9/27	・文化祭ビデオ鑑賞	・各班の班長とよい点や悪い点など話し合った。	・特別教室で行うことや、座席の配置を工夫するなど、楽しい雰囲気作りができるように助言した。
10/3	・文化祭の反省（全体・自己評価）	・司会進行 ・文化祭委員として全体のまとめを述べた。 ・評価できる友達についてお互いに発表した。	・評価できる友達については、後日全員のものを学年通信に印刷して、配布した。

(1) 取り組みの経過

生徒は、相互評価表の項目を自由に作ったが、はじめは項目数も少なくばくぜんとしたものであった。しかし、指導者は無理に評価項目を増やすことはしないで、二度にわたるリハーサルで他の班員に付けてもらった相互評価表を基に、各班で項目数を増やしていった。

各班とも、相互評価表の結果を見ながら、出し物の改善を行った。さらに、文化祭委員や班長たちはリハーサルの状況を録画したビデオを見て、自分たちの班の課題を見つけ、改善策を具体的に練っていった。4班ともに、一度目の評価よりも二度目の評価の方が明らかに改善された様子が見受けられた。そのことにより、生徒一人一人により質の高いものにしようとする意欲が湧いてきて、自発的に創意工夫を凝らしていくようになった。

(2) 取り組み後

文化祭後、当日の様子を録画したビデオを鑑賞し、各班に別れて反省会を行った。その後、ホームルームとしての文化祭の自己評価表を全体で話し合って作成した。

この自己評価表を基に、以下の4点をねらいとして反省会を行った。

- ① 今までの取り組みを振り返り、取り組みの成果を認め励まし合う。
- ② ホームルームの一員として話し合いに参加し、意見をもつ。
- ③ 友人のよいところを見つけ、ともに励まし合う。
- ④ 今までの自分自身の取り組みを客観的に、的確に評価する。

表 自己評価表例

文化祭	自己評価表						
<p>〇〇〇高校 2年5組</p> <p>テーマ <b>目標</b> <b>スローガン</b> (団体の主義・主張)</p>	<p>「<sup>きわみ</sup>極」 (妥協せずとことん楽しみ抜こう!) <b>素を出そう!!</b> (そこまで行き着こうと設けたためあて)</p> <p><b>一人一人が楽しもう!!</b> <b>明るく、楽しく、元気!!</b> <b>恋をしようよ!</b></p>						
みんなで協力できた。	<table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="width: 20px;">5 (良い)</td> <td style="width: 20px;">3</td> <td style="width: 20px;">1</td> </tr> <tr> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> </tr> </table>	5 (良い)	3	1	-----	-----	-----
5 (良い)	3	1					
-----	-----	-----					
気を抜かずにできた。	<table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="width: 20px;">5 (良い)</td> <td style="width: 20px;">3</td> <td style="width: 20px;">1</td> </tr> <tr> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> </tr> </table>	5 (良い)	3	1	-----	-----	-----
5 (良い)	3	1					
-----	-----	-----					
計画通りに進められた。	<table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="width: 20px;">5 (良い)</td> <td style="width: 20px;">3</td> <td style="width: 20px;">1</td> </tr> <tr> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> </tr> </table>	5 (良い)	3	1	-----	-----	-----
5 (良い)	3	1					
-----	-----	-----					
当日、段取りよくできた。	<table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="width: 20px;">5 (良い)</td> <td style="width: 20px;">3</td> <td style="width: 20px;">1</td> </tr> <tr> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> </tr> </table>	5 (良い)	3	1	-----	-----	-----
5 (良い)	3	1					
-----	-----	-----					
観客を盛り上げられた。	<table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="width: 20px;">5 (良い)</td> <td style="width: 20px;">3</td> <td style="width: 20px;">1</td> </tr> <tr> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> </tr> </table>	5 (良い)	3	1	-----	-----	-----
5 (良い)	3	1					
-----	-----	-----					
舞台装置作成をしっかりとできた。	<table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="width: 20px;">5 (良い)</td> <td style="width: 20px;">3</td> <td style="width: 20px;">1</td> </tr> <tr> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> </tr> </table>	5 (良い)	3	1	-----	-----	-----
5 (良い)	3	1					
-----	-----	-----					
明るく、楽しく、元気に文化祭に参加した。	<table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="width: 20px;">5 (良い)</td> <td style="width: 20px;">3</td> <td style="width: 20px;">1</td> </tr> <tr> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> </tr> </table>	5 (良い)	3	1	-----	-----	-----
5 (良い)	3	1					
-----	-----	-----					
文化祭を楽しむことができた。	<table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="width: 20px;">5 (良い)</td> <td style="width: 20px;">3</td> <td style="width: 20px;">1</td> </tr> <tr> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> </tr> </table>	5 (良い)	3	1	-----	-----	-----
5 (良い)	3	1					
-----	-----	-----					
素を出した。	<table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="width: 20px;">5 (良い)</td> <td style="width: 20px;">3</td> <td style="width: 20px;">1</td> </tr> <tr> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> <td style="border: none;"> ----- </td> </tr> </table>	5 (良い)	3	1	-----	-----	-----
5 (良い)	3	1					
-----	-----	-----					
<p>Q1 今回の文化祭を通して、自分を高く評価できる場所はどんなところですか?</p> <p>Q2 ① 5組で評価できる人は誰ですか?</p> <p style="padding-left: 20px;">② 自分のどんなところがよかったですか?</p>							
<p>～ 今日反省会の感想 ～</p>							

4 結果と考察

(1) 一人一人の興味・関心に基づいた細かな役割分担 (指導・援助の観点B)

文化祭の取り組みの過程の中で、生徒は自分が何をすればよいか分からなくなった。(図1参照)

そこで、文化祭委員が中心となって、生徒一人一人に細かい役割分担を決めさせたことで、自分が何をすればよいか明確となり、活動意欲が増すことにつながった。

『文化祭の取り組みをスムーズにするには?』

- ・しっかりした計画、予定表などを作る。(多数)
- ・チームワークと一人一人の自己責任と積極性が大切です。
- ・みんなが責任をもって行動する。
- ・やるべきことを出して、順番ごとに振り分けて作業をする。

図1 文化祭アンケートでの生徒の意見



また、各班で「取り組みのしおり」を作成して活動するとともに、各班の班長が準備の進行状況などを教室に掲示したことで、生徒に責任を果たさなければならないという自覚をもたせることができた。

### (2) 準備計画の立案（「取り組みのしおり」と相互評価）（指導・援助の観点C）

生徒は、細かな準備計画を立てることや相互評価表を作ることの難しさを感じながらも、これらを作ることの必要性和効果を十分に実感した。一度目の反省会よりも、二度目の反省会の評価の方が明らかに高くなっていて、努力の成果をはっきりと実感することができた。

『相互評価表があつてよかった点は何ですか？』

- ・直接言いつらいことも言えたのでよかった。
- ・改めて反省する点、良かった点に気付くことができた。
- ・評価が点数として出るので、実感できるのでよかった。
- ・足りないところが評価として目で見ることができた。
- ・次にどんな風にしたらよいかがすぐ分かった。

また、生徒の相互評価表についての感想（図2参照）からも、相互評価表が、

図2 相互評価表への生徒の感想

生徒一人一人に達成感や充実感を生み、次の取り組みへの意欲にもつながるものとなった。このことから、生徒一人一人に対して計画性をもたせた自主的・自発的な行動を促し、達成感や充実感が得られるように指導・援助を行うことが大切である。

### (3) 反省会の実施（他者及び自己評価）（指導・援助の観点E）

生徒は自分自身の自己評価を行うのが難しいと感じていたが、各班で相互評価項目を立てることで、自分自身を評価の対象として客観的にとらえることができるようになった。また、自己評価と他者からの評価との比較により、的確な自己評価を行おうとする姿勢が感じられた。

『5組で評価できる人は誰ですか？』

- ・委員としてしっかりホームルームをまとめてくれた。
- ・買出しなど嫌がらず、積極的に取り組んでくれた。
- ・他の班のことも進んで協力してくれた。

『自分のどんなところがよかったですか？』

- ・出し物が盛り上がらなかった時、恥を忘れ、みんなで盛り上げ役をしたところ。
- ・司会をするために、班員と細かい所の打ち合わせを何度もしたところ。
- ・ダンスを自分たちで考えたところ。

（図3参照）

図3 自己評価表への生徒の感想

さらに、反省会において、生徒が互いに評価し合ったことで、ホームルームの一員としてのつながりが強まると同時に生徒一人一人の自信につながった。

この反省会后、授業での質問なども含めホームルーム内で活発に発言できる生徒が増え、ホームルームの雰囲気はよくなった。今回の実践から、文化祭の取り組みは、集団や社会の一員として望ましい資質をはぐくむ上で有効である。その効果を最大限に活用するためには、細かい指導計画や生徒が楽しんで取り組めるような工夫を凝らす必要がある。特に、取り組み過程そのものに関心をもたせることで、集団や社会の一員として望ましい資質をはぐくんでいけるといえる。

### 事例3 ホームルーム活動

#### 集団や社会の一員としての望ましい資質をはぐくむ指導の工夫 ～構成的グループエンカウンターを取り入れた自己理解を深める取り組み～

#### 1 指導のねらい

新学習指導要領では、ホームルーム活動の(2)に、「自己及び他者の個性の理解と尊重」が挙げられている。このことは、社会の変化が激しい現代において、人間関係の希薄化、社会体験などの直接体験の不足から、高校生にとって自分の存在に価値を見出し、目標をもって主体的に生きていくことが難しくなっているためであると考えられる。

本研究のアンケート調査でも、生徒の多くは「自分の長所より短所を自覚している」、また、「自分の考えていることを相手に誤解されることがある」と回答している。集団や社会の一員として望ましい資質をはぐくみ、目標をもって生きていくためには、生徒一人一人が自分の長所を含めた自己をきちんと理解し、他者とのかかわりの中で自己の存在感を実感することが大切である。

そこで、本事例は、卒業を翌年に控えた3年生に対し、自主的・自発的に自らの進路について考えられるよう、以下の3点をねらいとする一連の自己理解プログラムを実践した。

- ① 自己理解ワークシートなどを活用し、自己理解を深める。
- ② 構成的グループエンカウンターを利用することで、自己理解を深めるだけでなく、他者との関係で自分の存在感を実感し、自らの進路や将来について、より深く考えさせる。
- ③ ①、②から、集団や社会の一員であるという自覚を深め、望ましい資質の育成を図る。

#### 2 対象 普通科 全日制課程 第3学年 30名

#### 3 取り組み

##### (1) 取り組みのきっかけ

例年3年生の多くは、自らの進路や将来に不安を抱き、「自分は何をしたいのか」、「何に向いているのか」を分からないでいる。このような状況から、生徒一人一人が自己理解を深め、豊かな人間関係を築きながら、自己実現を図っていくことが必要であると考えた。

##### (2) 具体的な取り組み

1学期末、指導者は、生徒に自己をより深く理解することを目的としたホームルーム活動を行うことを伝え、表1のような活動計画をもとに、自己理解を図るための一連の実践を開始した。まず「自己理解シート」や「自己推薦文」により、生徒自ら自分を分析し、表現する練習をした。しかし、自己の個性や適性、長所と短所、興味・関心などについて、自分だけで把握することは難しい。このため、構成的グループエンカウンターの手法を導入し、他者との話し合いの中から自己理解が図れるようにした。

※構成的グループエンカウンター  
構成的グループエンカウンターとは、①リーダーによるインストラクション ②参加者の思考・感情・行動に揺さぶりをかけるための演習であるエクササイズ ③参加者の思考・感情・行動を修正・拡大するためのふりかえりであるシェアリング、の3部からなるグループの教育力を利用した体験学習的サイコエデュケーション、もしくは集団対象の能動的カウンセリングである。

表1 活動計画

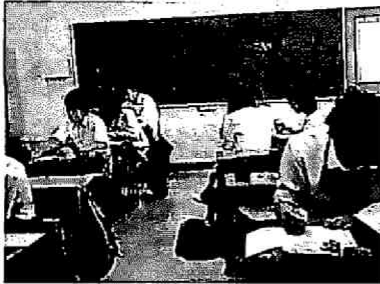

時	日時	ねらい	活動内容
1	7/17 LHR	自分をどれだけ理解しているのかを自覚する	「自己理解シート」の作成
2	9/2 LHR	長所と短所を挙げ、自己PRを文章で書く	「自己推薦文を書いてみよう！」の作成
3	10/2 LHR	後述	構成的グループエンカウターの手法を利用した「自己PRさがし <sup>1)</sup> 」の実践
4	10/9 LHR	長所と短所を挙げ、自己PRを文章で書く	「またまた、自己推薦文にチャレンジ！」の作成
5	10月下旬	自己PRを口頭で相手に伝える	面接指導を通した自己PRの直接指導
6	11/13 LHR	進路選択に伴う迷いや不安、あいまいさを自分の中で整理する	構成的グループエンカウターの手法を利用した「迷える子羊の宝探し <sup>2)</sup> 」の実践
7	11/20 LHR	たった一つの行為がどれだけの人を巻き込み、どれだけ人生に影響を与えるかを多面的に理解する	構成的グループエンカウターの手法を利用した「一つの事件から <sup>3)</sup> 」の実践
8		自分の将来について見通しをたて、計画性をもつ	作文「10年後の私」

1) 園分康孝監修「エンカウターで学級が変わるー高等学校編ー」図書文化社(1999)『自己PRの情報集め』(坪内俊輔)を改変作成

2) 片野智治編著「エンカウターで進路指導が変わる」図書文化社(2001)『迷える子羊の宝探し』(橋本登)を改変作成

3) 押切久遠著「非行予防エクササイズ」図書文化社(2001)『一つの事件から』を改変作成

(3) 本時の活動～構成的グループエンカウターの実施「自己PRさがし」～

ねらい		
時間	生徒の活動	教師の活動及び指導・援助の留意点
ねらい	① 客観的な自己理解を図るために、相手から見た自分の姿に関する情報を集める。 ② 自己のよさを発見し自己肯定意識を高めるとともに、自己PRを容易にする。	
10分 導入	ワークシート(図1)を一人2枚受け取る。 本時のねらいを黙読する。 	進路実現のために、自己をPRする能力が求められていることを伝える。 ワークシートを一人2枚配布し、ねらいを黙読させる。 本時のねらいは、相手からの評価を参考に、自己PRのための情報を収集することであると説明する。
30分 展開	3人グループを作る。 二人の相手について、ワークシートに記入する。(個人作業)(15分) ワークシートを二人の相手から受け取り、気付いた点や感じた点を話し合う。(10分) 受け取ったワークシートを読み、自己PRを箇条書きにしてみる。(5分) 	人物評価の伝え方をデモンストレーションしてみせる。生徒のよい面を語り、相互の関係を和やかにする。3人グループを作らせる。 ワークシート記入時における相手についての評価や話し合いの中で、相手の人格を傷付けることのないよう、人権上の配慮を十分に行う。
10分 まとめ	グループで自己PRを発表し合う。 終了後、感じたことや考えたことを話し合う。	人は他人と関わりながら生きてきていること、そして、今日感じた自分の肯定的な面を伸ばすよう努力することが大事であると補足する。

自己PRさがしー自己理解のためにー

◇ ねらい

企業では、新入社員を採用する際、自己PRをさせることが多くなりました。私も教員採用試験の際、自己PRをした記憶があります。背景には、学齢よりも、その人自身は何ができるかを表現させて、変化に対応できるような人材を確保したいという思惑があるようです。大学入試も多様化し、生徒を多角的に判断し入学を決めるAO入試がさかんになってきています。

高校生の進路決定に求められているのは、あなた自身が、高校3年間でどのような成長を遂げたのかを客観的に知っていること、そしてそれを表現できることといえます。

そこで今日は、あなたの身近にいる友人からあなたを人物評価してもらうことで、あなたが自己PRをするための情報を集める時間を取ります。自己PRのためには自己理解が欠かせないと思うからです。

さあ！自分さがしの旅に出かけよう。

To( )、わたしについて記入をお願いします。

From( )

◆ エクササイズ1

- ① 3人グループをつくります。
- ② 自分以外の二人のワークシートを完成させます。
- ③ 時間は15分です。

1. 私とはじめて会ったときの第一印象について聞かせてください。
  - a.それは、いつごろですか。
  - b.どう思いましたか。
  - c.それはなぜですか。
  - d.私の印象は、その後どのように変化し、現在に至っていますか。
2. 私の性格について、自由に述べてください。
3. 私の長所と、その理由、エピソードなどを聞かせてください。
4. 以下の10項目について、あなたの思うとおりに評価してください。

①	私の行動力は	かなりある	ふつう	努力が必要だ
②	私の忍耐力は	かなりある	ふつう	努力が必要だ
③	私の自己主張能力は	かなりある	ふつう	努力が必要だ
④	私の反省する力は	かなりある	ふつう	努力が必要だ
⑤	私の持続力は	かなりある	ふつう	努力が必要だ
⑥	私の責任感	かなりある	ふつう	努力が必要だ
⑦	私の発想力は	かなりある	ふつう	努力が必要だ
⑧	私の計画力は	かなりある	ふつう	努力が必要だ
⑨	私のリーダーシップ力は	かなりある	ふつう	努力が必要だ
⑩	プレッシャーには	つよいほうだ	よわいほうだ	

5. ざばり一言で言うと、私のアピールポイントは何ですか。

◆ エクササイズ2

- ① 記入された用紙を受け取ります。
- ② 読んで、感じたことや気付いたことを3人で話し合しましょう。
- ③ 時間は10分です。

◆ エクササイズ3

自己PRを箇条書きで3つ書き出してみよう。

(國分康孝監修「エンカウンターで学級が変わるー高等学校校編ー」図書文化社(1999)『自己PRの情報集め』(坪内俊輔)を参考に作成)

図1 「自己PRさがし」ワークシートの内容

#### 4 結果と考察

はじめに行った「自己理解シート」の結果を見ると、多くの生徒が自分の存在を「特にない」「まじめ」「静か」などの一つの単語で表しており、自分に対する表現力が乏しいことが分かった。

次に「自己理解シート」を踏まえ、「自己推薦文を書いてみよう！」に取り組んだ。その際、自分の長所及び短所を3つずつ考え、それに基づき、文章にまとめて書くよう

努力させた。しかし、多くが自分の短所を中心とした推薦文になってしまい、自己肯定感を高めることが必要であることが分かった。

そこで、構成的グループエンカウンター「自己PRさがし」の実践を行った。

表2 「自己PRさがし」前後における生徒の変化

生徒	「自己推薦文を書いてみよう」9/2 LHR	「自己PRさがし」10/2 LHR	生徒の変化
A	(短所) ・落ちつきがない。 ・後先のことをあまり考えない。 ・一つのことになりすぎず。	→ ・明るいらしい。行動力はあったみたいだが、意識していなかった。	他者からの指摘により、自分の短所を長所としてとらえられるようになり、自信につながった。
B	…マイナス部分ばかり思いついてしまっているが…	→ ・好きなことに熱中、集中できる。 ・根気よく続けることができる。 ・自己の主張がはっきりできる。	自分では気付かなかった自分の長所をいくつも発見した。
C	(長所) ・物事を最後までやりとげる。 ・妥協しない。	→ ・信頼されている。 ・協調性がある。	自分が努力している点や長所としてとらえている点が、相手からも認められていることを自覚し、さらなる自信につながった。

\* 「自己PRさがし」を実施した際の生徒の感想

- ・ 普段付き合っている友人から率直な意見を聞け、自分が人からどう思われているかよく分かった。
- ・ 意外と自分をよく見てくれていてうれしかった。
- ・ 自分では人付き合いが悪そうだと思っていたが、人から見るとそうでもないことに気付いた。
- ・ やはり自分はまじめに見えるのだなと思った。忍耐はあると思われている。責任感がある。積極性を養うべきと思った。
- ・ 責任感があると思われているらしい。積極性や自己主張ができるようになればよいみたいです。

その結果、上記のような感想があり、多くの生徒が今までと違った自分を発見した。

「自己PRさがし」前後における生徒の変化を表2に示す。

「自己PRさがし」では、生徒は他者との関係で自己の存在感を実感するとともに、肯定的に自分をとらえられるようになったといえる。

また、その後の活動によって、進路選択に伴う迷いや不安、あいまいさを自分の中で整理することができた。

これらの実践後、生徒は、的確な自己分析と他者からの分析をもとに、入試の自己PR文や志望理由書を書けるようになった。

以上のことから、実践前に比べ生徒に自己理解が深まり、指導のねらいとした「望ましい資質をはぐくむ出発点となる自己理解」を十分に達成できた。

今後の課題としては、

- ① 進路選択において、自主的・自発的な活動を促すために、より効果的な構成的グループエンカウターの運用を図る。
- ② 次のような評価の観点にしたがって、具体的に生徒の変化を評価できるようにする。
  - ア 生徒一人一人が自己理解を深め、人間としての在り方生き方を真剣に考えることができたか。
  - イ 集団や社会の一員としての自覚を深められたか。

が考えられる。教室が自分を思う存分発揮し語り合える場、認め合える場として存在できるように、継続的に生徒の活動を指導・支援していく必要がある。

## 事例4 学校行事

### 集団や社会の一員としての望ましい資質をはぐくむ指導の工夫 ～移動教室を通しての取り組み～

#### 1 指導のねらい

本研究の主題設定理由でも触れたが、今日、青少年の人間関係の希薄さ、連帯感の薄れ、規範意識の低下などが問題視されている。このことは、本校でも大きな課題としてとらえており、対策が検討されてきた。

そして今年度、次の3点を主なねらいとして、入学後の早い時期に宿泊行事を取り入れた。

- ① 規律ある集団生活の中で、生徒一人一人が役割を負い、その責任を果たすことを通して、集団の成員としての自覚をもつ。
- ② 生徒が中心となり企画運営をすることで、自主的・自発的な活動を促し、達成感・充実感を得る。
- ③ 集団生活を通して互いを理解し、認め合うことで、コミュニケーション能力を高める。

#### 2 対象 普通科 全日制課程 第1学年 237名

#### 3 取り組み

##### (1) 移動教室の実施計画

学年担任団の決まった2月上旬に移動教室の実施を検討した。

場所は目的や費用などを考慮し、大島セミナーハウスを利用することにした。また、交通機関は今年度就航の竹芝栈橋を朝出発し、2時間弱で大島に到着できる高速船を利用することにした。

対象とする生徒の入学前までに移動教室実施の目的・方針・基本骨子を決定した。

##### (2) 実行委員会・ホームルームの流れ

入学式の翌日、各ホームルーム2名以上の実行委員を募集し、16名が集まった。この16名が中心となり、企画の検討及び運営を行った。入学してから移動教室までの短期間に7回の実行委員会を行った。

実行委員会を指導するにあたり、下の3点に留意した。

- ① 実行委員の生徒が行事の目的をきちんと理解する。
- ② 指導者は基本骨子を伝え、実行委員の生徒が全体の流れをつかめるようにする。
- ③ 指導者は必要に応じた指導・助言を行い、生徒が中心となり話し合いを進める。

実行委員の生徒は、短期間の内に活発に話し合いを積み重ね、様々な企画を検討した。

また、実行委員の生徒は、ホームルームの時間に必ず、委員会で話し合った内容を説明し、ホームルームの生徒からの質問を受け付け、次回の委員会で、更に内容を協議し決定するという作業を繰り返した。その結果、生徒全員が実行委員会の動きや、移動教室の目的を理解し、行事への意識が高まっていった。(表1)

表1 実行委員会とホームルームの流れ

実行委員会の流れ	ホームルームの流れ
4/9(火) 入学式	
	実行委員を選出
4/10(水) 第1回 実行委員会 (実行委員会の体制を決定) (移動教室の目的・基本骨子説明)	委員会報告
4/12(金) 第2回 実行委員会 (班編成について、班内の役割分担の設定)	質問事項収集
4/15(月) 第3回 実行委員会 (運動会、キャンプファイヤーの内容協議) (実行委員の担当分担)	委員会報告 班編成・役割分担、班員名簿提出
4/17(水) 第4回 実行委員会 (運動会、キャンプファイヤーの内容協議) (各担当の仕事内容確認、しおり作成)	委員会報告 企画内容提案・審議
4/19(金) 第5回 実行委員会 (しおり綴じ込み)	委員会報告 企画内容決定・説明
4/22(月) 第6回 実行委員会 (運動会、キャンプファイヤーの内容協議) (各担当の仕事内容確認)	委員会報告 しおり配布・説明
4/23(火) 第7回 実行委員会 (前日指導の打ち合わせ、持ち物準備)	委員会報告 企画内容の詳細説明
4/24(水) 前日指導	

(3) 企画・検討内容

実行委員から次のような意見が出され、検討をした。

① 班分けについて

班分けの方法についても実行委員会で意見が出され、検討をした。

「班はホームルームの枠を離れ、学年全体で組む。その際、同じ出身中学の仲間とはできる限り組まないようにし、やむを得ない場合には2人までとしてはどうか？」という提案であった。これは、「ホームルームの仲間とは普段の学校生活の中で接する機会が多く、また移動教室までに交流できる機会が多くある。そのため、移動教室ではホームルームの枠を取り払い学年全体の横のつながりを深めたい」というのが理由であった。

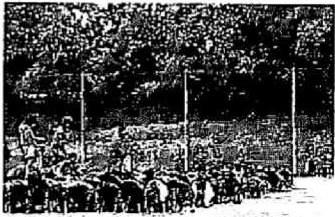

具体的に日程などを検討した結果、準備が間に合わないということで断念をしたが、今後の校外行事(修学旅行など)で実現させることとなった。

② 行程について

行程内の各企画内容について検討をし、実行委員会とホームルームとの間で話し合いを重ね、実施内容を決定した。

検討、決定した内容は表2の通りである。

表2 行程の検討内容

	生徒の活動	指導者の指導・援助
1日目午後 【島内散策】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海の見えるコース</li> <li>・班ごとに行動</li> <li>・目的地に到達した班から昼食</li> <li>・昼食後は決めた範囲内で自由行動</li> </ul> <p>など</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料の収集、紹介</li> <li>・利用可能施設の紹介</li> <li>・利用可能物品の紹介</li> <li>・素案づくりの助言・指導</li> </ul>
1日目夜 【ホームルーム】 【係会議】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に各担任、係担当指導者と話し合いの内容を検討</li> <li>・当日の運営は実行委員で実施</li> <li>・内容による会場の割り振り</li> </ul> <p>など</p>	 <p>運動会の様子</p>
2日目午前 【球技大会】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バレーボール、卓球、バドミンントンの3種目</li> <li>・ホームルーム対抗</li> <li>・審判は各種目の経験者に依頼</li> </ul> <p>など</p>	
2日目午後 【運動会】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一部の生徒だけがする選手種目ではなく、皆で参加できる種目を選択</li> <li>・各種目のルール、得点など、実施方法を決定</li> <li>・審判は教員に依頼</li> </ul> <p>など</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安全性への配慮</li> <li>・各企画、決定後の手配</li> </ul> <p>など</p>
2日目夜 【キャンプファイヤー】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・御神火太鼓の実演及び体験の依頼</li> <li>・点火式の方法(炎を着色)</li> </ul> <p>など</p>	 <p>御神火太鼓の体験</p>
3日目午前 【三原山登山】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登山経路の選択</li> <li>・山頂付近にチェックポイントを設置</li> </ul> <p>など</p>	

(4) 実施中の様子

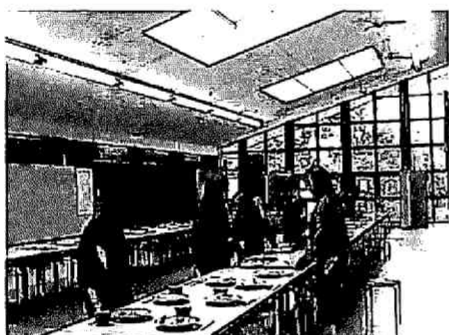
実行委員会は点呼をはじめ、各企画の司会・運営の全てを積極的に行った。他の生徒も全員が班長・食事・清掃・保健・入浴などの係にあたった。食事の配膳、布団の上げ下ろし、宿舎の清掃にいたるまで自分たちで行わなくてはならない環境で、各自の役割を自覚し、自主的・自発的に行っている様子が見られた。

また、出発前に多く見られた2、3人の小規模な集団が、企画の進行に伴って徐々に大



きくなり、4、5人の集団あるいはそれ以上の集団になっていった。

さらに、初めは硬かった生徒の表情が、時間が経過するにつれて次第に柔らかくなり、明るく、豊かな表情に変わっていった。



食事の配膳風景



話し合い活動

#### 4 結果と考察

今回の移動教室は内容企画の段階から生徒がかかわり、運営をした。また、実施中も全員が何らかの役割を負い活動をした。実施中の様子から、生徒は一人一人が責任を果たすことで集団の成員としての自覚をもち、自主的・自発的に活動することで達成感や充実感を得ることができた。下に生徒の感想文の一部を紹介したが、他の多くの感想文に「初めは行くのが不安だったが、行ってよかった。」というものが多数あった。移動教室を通して、生徒間にコミュニケーションの輪が広がり、人間関係を築くことができたのではないかと考える。また、指導者にとっても学校内では見ることのできない生徒の人間関係や様子、表情を見ることができた。また、ゆっくりと会話のできる時間がもてたことで、早い段階で多くの生徒の理解を深めることができ、その後の生徒指導に役立てることができた。

～ <生徒の感想文より> ～

A 初めは行くのが嫌でした。まだ、あまり学校に慣れていないのに、2泊3日もするなんて行く気がしませんでした。今では、行ってよかったなと思います。理由は、友達が増えたり、もっと仲良くなれたからです。とてもうれしいです。<以降略>

B 私は伊豆大島に行くのも船に乗るのも初めてで、すごく楽しみにしていた。

<中略>

入学してまだちょっとしかたってなくて、知らない人ばかり集まって、まとまりの無かった感じがあったクラスがこの2泊3日で少しずつまとまってきたような気がした。みんなで頑張ったバレーボールなどすごく楽しかった。お風呂やご飯、自由時間等も充実していた。この2泊3日でたくさんの友達ができ、私にとって最高の2泊3日になりました。

#### IV まとめ

本年度特別活動部会では「集団や社会の一員としての望ましい資質をはぐくむ指導の工夫」という研究主題を設定した。この研究主題に基づき「望ましい資質とは何か」について検討した。

次に、今日の生徒が、学校生活や社会生活を送る上で、集団や社会の一員としての「望ましい資質」がどの程度はぐくまれているかを調査するために、アンケート調査を実施した。この調査結果を分析して、「望ましい資質」をはぐくむための指導・援助の観点をA～E（7頁参照）の5点にまとめて、以下の4点の実践事例に取り組んだ。

##### ○ホームルーム活動

事例1 障害者福祉作業所でのボランティア活動を通しての取り組み

事例2 相互評価を取り入れた文化祭の取り組み

事例3 構成的グループエンカウンターを取り入れた自己理解を深める取り組み

##### ○学校行事

事例4 移動教室を通しての取り組み

事例1では、障害者福祉作業所でのボランティア活動を実施して、生徒一人一人に責任を果たす場を提供したことで、集団や社会の一員として自覚ある行動が生まれた。また、事前学習を行ったことで、生徒一人一人が障害のある人との自主的・自発的な交流を深め、達成感や充実感が得ることができた。

事例2では、文化祭の取り組みで相互評価を取り入れたことで、生徒一人一人が責任をもち、ホームルームの一員として自覚ある行動を取ることができた。それにより、生徒らは達成感や充実感を得ることができた。また、指導者が、生徒を活動の過程で適切に褒め認めたことで、生徒一人一人が自分の長所を含めた自己をきちんと理解し、自分のよさを引き出し、伸ばし、自己の存在感を実感し、自信をもつことができた。

事例3では、自己理解を深めるために、構成的グループエンカウンターの手法を取り入れたことで、生徒一人一人が自分の長所を含めた自己をきちんと理解し、他者との関係で自己の存在感を実感し、自信をもてるようになった。

事例4では、生徒が企画・運営する移動教室を通して、生徒一人一人が責任をもち、学年の一員として自覚ある行動ができるようになった。また、生徒一人一人が集団の中で自分の居場所を見つけ人間関係を育成するとともに、学年としての規範意識を高めることができた。

これら4点の実践事例を通して、生徒は「望ましい資質」をはぐくむことができた。今後も、このような実践を学校生活全体で、長期的な計画に従って継続的、組織的に指導・援助していくことが大切である。